

内海の准教員講習所

されどこの点については後に回して、当時の師範教育そのもの実状について述べる必要があるけれども、それに先立って私としては、わずかに40週間前後であっても、「准教員講習所」について述べなければならない。そしてそれは①私にとっては初めて親（養父母）の手元を離れて生活したということと②場所が知多半島の突端に近い内海町で開かれ、③かつ榊原源吉、同嘉雄という2人の同級生と一緒に自炊生活をやって、お互いに終生忘れがたい思い出となったことである。しかも内海は日比の伯父の故郷であって、その家を借りて生活したのであった。

同時に、短期間ではあったが、この内海における共同生活の経験があったが故に、後に名古屋の師範学校生活も、いわば事前のクッションの役割を果たしたと云っても良い。例えば二階から裏の豆腐屋へ声をかけて、豆腐の釣り上げ買いをしたこととか、西隣にロシア系のキリスト教会（民家）があったとか、そのほか今なお忘れがたき懐かしい思い出深い地となっている。もし私にしてその内海における准教員講習の経験がなかったならば、私の少年期より青年期の過渡期の思い出ないし経験は、かなり貧しいものとなったことであろう。試みにその一例を言えば、私らは当時武豊より内海まで8キロ前後を、バスの便がなかったために歩いて往復したことであった。

こうして、この准教員講習会は短期間ではあったが、人数も18名ほどの少人数でもあり、友人3名との自由な自炊生活でもあり、あらゆる意味で、そのあとの「学校生活」の萌芽というか母胎とも言え、私にとっては、夢幻的な懐かしさがある。されば「ifもし」これがないならば、まるで幼児の一時期が、学校生活において欠落したものと言える。かかる点でもわたくしは「神天」の配慮の申し分ないことを思うわけである。